

〔巻頭言〕

対立の中で生きる

浄土真宗本願寺派総合研究所長

佐々木義英

世界各地で戦争や紛争が絶えず、かけがえのないのちが失われています。平和を願ってもなお、対立と暴力の連鎖が続く現実を前にして、わたしたちは無力感を覚えざるを得ません。その現実に向き合うとき、浄土真宗の教えがあらためて問われているのではないのでしょうか。

親鸞聖人は自らを「煩惱具足の凡夫」と仰せになり、そして、すべての人々に対して「同朋・同行」と仰いました。わたしたちの心は常に自己を優先し、それが争いの温床となります。凡夫の力ではこの心を制御することも、争いをなくすこともできません。その自覚のもと、聖人は阿弥陀如来の本願に身を託し、念仏の道を歩まれました。

「同朋・同行」という視点は、戦争や対立に満ちた現代を照らす大切な指標となるものです。誰もが煩惱を抱えながら阿弥陀如来に救われる身であると知らされるとき、相手を憎しみや排除の対象ではなく、共に生きる仲間として受け止めることができます。そして、阿弥陀如来の「必ず救う」という本願に出遇うとき、憎しみや対立を超える歩みの端緒となるように思います。

本研究もこの課題を自らの問題として受けとめ、念仏の教えに立脚した研究と発信を深めてまいります。戦争と平和を浄土真宗の視点からあらためて問い直すことは、未来への道を拓くための大切な課題であると考えております。